

本邦における好酸球性筋膜炎患者に関する研究

研究分担者 山本 俊幸 福島県立医科大学医学部医学科 教授

研究要旨

本邦における好酸球性筋膜炎の実態調査を目的に、多施設共同研究を施行した。7つの大学病院で過去5年間に本症と診断された症例は30例で、男女比は2.3:1で男性に多く、平均年齢は47.7歳であった。3例は20歳未満で発症していた。誘因は運動などの身体的負荷がみられたが、同定できないものも少なからずあった。斑状強皮症の合併は3割にみられた。悪性腫瘍の合併は3例にみられた。血清学的には、抗核抗体、リウマチ因子、IgG高値、アルドラーゼ上昇、などが認められた。治療は副腎皮質ステロイド薬、メトトレキサート、シクロスポリンなどが主に使用されていた。重症例にはメチルプレドニゾロンパルス療法が施行されていた。

A. 研究目的

好酸球性筋膜炎は比較的稀な疾患であり、一施設で多数例を経験することは少ない。そこで、国内の7つの大学（熊本大学、東京大学、金沢大学、群馬大学、筑波大学、和歌山県立医科大学、福島県立医科大学）で過去5年間に本症と診断された患者についての多施設共同研究を施行した。

B. 研究方法

患者の年齢、性別、罹病期間、誘因、職業、併存症、臨床検査、治療について調査した。

（倫理面への配慮）

倫理委員会での承認済

C. 研究結果

本邦で提唱された診断基準を満たした30例の男女比は2.3:1で男性に多く、平均年齢は47.7歳であった。3例は20歳未満で発症していた。誘因は運動などの身体的負荷がみられたが、同定できないものも少なからずあった。斑状強皮症の合併は3割にみられた。悪性腫瘍の合併は3例にみられた。血清学的には、抗核抗体、リウマチ因子、IgG高値、アルドラーゼ上昇、などが認められた。治療は副腎皮質ステロイド薬、メトトレキサート、シクロスポリンなどが主に使用されていた。重症例にはメチルプレドニゾロンパルス療法が施行されていた。

D. 考察

本邦患者の特徴として、男性優位、小児発症は稀、免疫異常を示唆するパラメーターが陽性、斑状強皮症との合併が多いこと、などが挙げられた。

E. 結論

本症の発症誘因として運動負荷が以前より知られているが、本研究の結果からは従来考えられていたほど多くはなく、薬剤や悪性腫瘍、あるいは未知の要因が本症の発症に関与している可能性が考えられた。

F. 健康危険情報

G. 研究発表

1. 論文発表

1. [Yamamoto T](#), Ito T, Asano Y, Sato S, Motegi S, Ishikawa O, Matsushita T, Kazuhiko Takehara K, Makino T, Okiyama N, Fujimoto M, Jinnin M, Ihn H. Characteristics of Japanese patients with eosinophilic fasciitis: a multicenter brief study. *J Dermatol* 47; 1391-e1394, 2020.
2. [Watanabe Y](#), Yamamoto T. A case of eosinophilic fasciitis and generalized morphea overlap. *Dermatology Online J* 26; 13030, 2020.

2. 学会発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

2. 実用新案登録

3. その他